



一般社団法人

# あぶくまエヌエスネット



土・自然から学び、共に生きよう  
大自然の中で子どもたちをのびのびと遊ばせたい  
ぼんた学長(進士徹)が打ち込んだ33年の思い…

ぼんた山 元気楽校 (一般社団法人あぶくまエヌエスネット)  
福島県東白川郡鮫川村赤坂東野葉貫 57 ☎ : 0247-48-2508

# 泥だらけになってもいい 子どもたちには 自然の中で おもいきり遊んでほしい…それが原点



<ぼんた>こと 進士 徹さん

31歳で、東京から福島県鮫川村に移住してきた進士徹さん一家。きっかけは、長男が1歳のときに重い心臓病を患ってしまったこと。「子どもと1分1秒でも一緒にいたい。そのために、父親として自分は何かができるだろう」…悩み、考えた進士さんは、索莫とした都会を離れ、自然豊かで空気のきれいな田舎へ移住することを決めました。「泥だらけになってもいい、子どもを自然の中でのびのびと遊ばせてやりたい」——進士さんの新たな人生の選択でした。

あれから33年。いま、鮫川村には元気な子どもたちの声と笑顔あふれる場所があります。ぼんた山元気楽校…進士さんが、家族や仲間と共に地域で育ててきた里山の自然学校です。

## ぼんたの思いが詰まった里山の自然学校 〈ぼんた山元気楽校〉

■福島県阿武隈高地の南端に位置し、人口3千人にも満たない村の一つに鮫川村があります。その中でも標高650mの山あいの地に「ぼんた山元気楽校」があります。

美しい山々の風景と水源に恵まれたこの地区は、都会とは何か違う時間（とき）が流れているような感じさえします。人々は、そこで自然と共生しながら日々の暮らしを営んでいます。

■土・自然から学び共に生きよう  
——これが「ぼんた山元気楽校」のコンセプトです。小・中学生がぼんた山に集まり、大自然の中で思いっきり遊んで田舎暮らしを体験できる場所です。子どもたちはここで新しい仲間と生活を共にし、遊びや学びを通してコミュニケーションや自己表現のしかた、自立心を養い成長しています。学長は進士徹さん。なぜか、みんなは彼を「ぼんた」と呼んでいます。

■ルーツは33年前。ぼんた一家が鮫川村にやってきて、仲間や村と共同で立ち上げた山村留学「たけとんぼ学園」——都会の子どもたちが鮫川の子どもたちと一緒に学び、廃校になった分校で共同生活をしながら田舎暮らしを体験していました。学校から帰ると自然の中で思いっきり遊び、休みの日は農業体験。子どもたちは、初めて収穫したジャガイモに歓声を上げました。ぼんたは、それを見て思いました。大地に向かうこと（農業）は





子どもたちはアドベンチャー。  
子どもたちは、ゲームが無くとも自然を相手にどんどん遊びを見つけていきます。泥んこになっても怒られません。思いっきり遊び、土に触れることで自然の偉大さを感じ取ります。初めて出会った子どもたち同士、コミュニケーションの取り方もちゃんと学んで笑顔がいっぱい。

土から命を貰うことなんだと。そこから、ぼんたは本気で農業に取り組んでみようと思いました。

■「たけとんぼ学園」は7年続きました。その後、ぼんたは今までの経験をもとに独立し、自然体験学校「WARBER元気倶楽部」、「子ども長期自然体験村」「ネイチャーキッズ」などを次々スタートさせ、毎年多くの子どもたちが首都圏から鮫川村のぼんた山にやってきました。

■2003年、ぼんたは「NPO法人あぶくまエヌエスネット」を設立すると、都市交流事業、リーダー養成事業、里山子どもレンジャー、海外青年ボランティアの受け入れなど活動の輪を拡大。対象者も子どもから全世代に広げたことで参加者もさらに増え、ぼんた山では常に子どもたちの元気な声が聞こえるようになりました。スタッフやボランティアも増え、活動が軌道に乗ってきたとき、あの東日本大震災・原発事故が起きたのです。

■その日を境に、ぼんた山から子どもたちの声が聞こえなくなりました。ぼんたの汗と努力の20年が

一瞬で消えてしまったのです。当時、ぼんた山では地震の被害は僅かでした。でも、原発事故による風評被害は大変でした。震災前、夏休みには毎年500人もの子どもたちがぼんた山のキャンプに参加していたのに、それがゼロ。県外から来ていたスタッフたちも避難。そして仕事も収入もゼロになりました。ぼんた山は放射線量も低く、子どもたちが外で遊んでも問題のないレベルだったのに…。

■でも、ぼんたは諦めませんでした。情報を集めるとすぐに「ふくしまキッズ」（復興事業）を立ち上げ、全国の自然学校や自治体と協力して、福島の子どもたちを県外の長期宿泊体験に参加させる活動を開始しました。行く先々で、放射線に気にせず思いっきり外で遊ぶ子どもたちの笑顔に力を貰いました。5年間でのべ6千人近い子どもたちが参加したこの事業。最後はドイツのザクセンへ…。参加した子どもたちは、いつか自分も恩を返せる大人になりたいという思いを抱いて、今も成長しています。



2019年4月に一般社団法人となった「あぶくまエヌエスネット」のロゴ。イラストは、11歳で亡くなったぼんたの長男尊主(たかもり)さんが書いたもの。楽しさが伝わってきます。



## 震災から10年—— 変わらない自然と笑顔……

■震災から10年。ぼんた山には以前のような子どもたちの笑顔と元気な声に戻っていました。震災から5年後の2016年、放射線の影響が落ち着いたと判断したぼんたは「ふくしまキッズ」を解散し、「あぶくまエヌエスネット」本来の活動に全力で取り組みました。

その中でもへぼんた山元気楽校は、原発事故で活動を制限された福島の子どもたちに、困難に負けない精神と豊かな心を育成することを目的とし、小、中、高校生や家族づれなど、世代を超えて活動できるプログラムとして実施してきました。ぼんた山には豊かな自然、山、川、野原がたくさんあります。子どもたちはここで新しい仲間をつくり、自然を相手にのびのびと里山の暮らしを体験しています。遊びから何かを発見し、失敗から学ぶ…これが、子どもたちの成長の力になります。

■体験プログラムの中でも人気があるのは、やはりへぼんた山元気楽校です。キャンプを通して体験したことは、子どもたちにとって忘れられない思い出です。食・農体験では、石窯ピザ・パン焼き、そば打ち、うどん打ち体験があります。ぼんた山といえば、特大サイズの石窯。焼き上がったピザやパンに歓声が上がります。そのほか、古民家での宿泊体験、田舎暮らし体験、農作業体験、ボランティア体験などがあります。最近では、海外ボランティアやワーキングホリデーでぼんた山を訪れる人もいます。もちろん、受け入れもOKです。

■また、由美子おばさん(ぼんたの奥さん)の元気野菜倶楽部(宅配)も大好評。ぼんた山で採れたオーガニック野菜、お米のほか、石窯パン、漬物、お餅、カステラなどの加工食品、手作りリンゴドレッシングなどを定期便で送っています。



新鮮野菜&元気米をお送りしています。  
オーガニックにこだわって育てた野菜・卵・お米、加工食品などをお届けする「元気野菜倶楽部」。安心して食べられるものを食卓に、そして未来につながる大事な命を守りたい…それが、ぼんた山の願いです。由美子おばさんが毎月1回、心をこめて会員さんにお送りしています。



今年の人参は大収穫。とても立派で見るからにおいしそう！価格は下げずに価値を高める。大好きな鮫川村でブランドの野菜を作るのが、農業を続けていくための陽平さんの誇りです。これからは農地をもっと広げていきたいと意欲的。

■ 由美子おばさんは、ぼんたが一番頼りにしている自然学校の要。感謝してもきれないとぼんたは言います。結婚して45年。どんな時もぼんたを信じてついてきてくれました。東京から鮫川村に来た時はまだ29才。田舎暮らしは全く初めてで不安だらけでしたが、村の人たちの親切に支えられたといえます。今はすっかり土地に馴染んでいます。ぼんた山にはなくてはならない存在になりました。誰にでも笑顔で接する優しいお母さん。イベントがあるときは食事の準備なども手順よく子どもたちに教えて

くれます。みんなから頼りにされる、ぼんた山の肝っ玉母さんというところですよ。「元気野菜倶楽部」の宅配便には、由美子さんの細やかな気配りも一緒に込められています。県外にいる2人の娘さんとお孫さんに会うのが楽しみという由美子さん。今はコロナ禍でなかなか会えない…と残念そう。

■ そして何より頼もしいのは、ぼんたの次男・陽平さん(24歳)。東京の大学を卒業後、オーストラリアで2年間のワーキングホリデイを経験して昨年帰国しました。しばらくは、ぼんた山の手伝いをしな

がら将来の人生設計について考えていましたが、ぼんたから「農業を本気でやってみないか」と言われて任されたことから、農業の楽しさに目覚めたといいます。現在はあぶくまエヌエネットの社員。ぼんた山の新しい農業についても誇りを持っています。「これからは農業も差別化の時代です。作付け面積も広げたいですが、自然農法に特化しつつ、更に特徴を加えていくことも必要だと思ふ。是非、野菜や卵のブランド化：やってみてくださいね」。後継者としての自覚もバッチリ。楽しみます。

## ●1ヵ月から始める田舎ホームステイ #Familyinn ふぁみりん



株式会社 Familyinn では、全国各地にあるゲストハウスに1ヵ月からホームステイをすることができるサービスを提供しています。地域の特色を知り、地域のコミュニティになじむことができるため、国内で留学のような体験ができることが特徴です。また、コロナ禍により、一層人との繋がりが希薄化した社会だからこそ、新しい形で人との繋がりを紡いでいき、血縁・世代を超えて支えある暮らし「新しい家族のかたち」を、手助けするプラットフォームサービスとして運営しているのも魅力の一つです。 <https://Familyinn.jp>



代表  
杉本朋哉



# 子どもたちの明日へつなぐ

——ぼんたの思いは、これからも続きます

■年に一度、ぼんた山で開催される「野原くんキャンプ」。比較的軽度の障がいを持つ子どもたちのための里山自然体験キャンプです。子どもたちは遊びを通してコミュニケーション力や人と交わる楽しさを身に付けていきます。自然には学校では得られない学びがあります。さまざまな生きづらさを抱えた子どもたちが、自然と触れ合いながら自分の居場所を見つけれ

る場所……。あぶくまエヌネットの思いを形にしたプログラム



「野原くんキャンプ」に参加できるのは小、中、高校生で軽度の障がいを持つ子どもたち。川遊び、プール、ゲートボールにTボール、スイカ割り、ピザづくり、畑の手伝い、鶏やヤギ、犬の世話など。3泊4日のキャンプは、同じような困難を抱えた仲間と過ごす楽しい時間です。

です。キャンプには、外部からも専門性の高いスタッフが加わり、ぼんた山のスタッフと一緒に活動しています。子どもたちとの触れ合いは、スタッフにとっても学びとなり、力となって次の活動につながっています。原発事故で失った子どもたちの時間を早く取り戻したい。ぼんたは、福島の子どもの笑顔と元気のために、このプログラムを毎年続けてきました。子どもたちが明日に向けて夢と希望を持ち続けるために…。



これからは二人三脚で！… ぼんたと陽平さん（右）

■ぼんたが歩んだ33年は、子どもたちの生きる力を信じて寄り添ってきたぼんたの人生そのものでした。自然に恵まれたぼんた山の風景がこの先も変わらないように、ぼんたの思いも変わらさず引き継がれていくことでしよう。

「重い心臓病の息子のことが根底にあって自然学校ができ、その思いが今につながっています。息子のお陰でここで暮らすことができ、家族とは、父親とは、人間的に生きるとは…など、大切なものを教えられ導かれてきたように思います。長男は11才という短い人生

でしたが、鮫川村が大好きでした。精一杯生きて、「あとは父ちゃんにバトンタッチするよ」と言われたような気がします。だからこの場所、何が何でも子どもたちの笑い声溢れる場所にしたいんです」—— ぼんた学長が大切にしていた思いの全てが、この言葉に込められていました。東日本大震災・原発事故を経験し、「福島の子どもたちを絶対に守る！」と決めたぼんた学長。今年も、ぼんた山には子どもたちの笑い声が聞こえています。

## ◆ 進士 徹(ぼんた)

一般社団法人あぶくまエヌネット代表理事

- 1956年9月11日 東京都大田区出身 (65歳)
- 1979 駒沢大学文学部社会学科社会福祉専攻コース卒業。社会福祉法人「ねむの木学園」就職
- 1987 東京から鮫川村に移住
- 1988 山村留学「たけとんぼ学園」設立
- 1995 自然大学「WARERA 元気倶楽部」設立
- 1999 「あぶくま自然大学」に改名
- 2003 NPO 法人あぶくまエヌネット設立
- 2019 一般社団法人あぶくまエヌネット設立

あぶくまエヌネットの活動は、ホームページでも確認できます。

<http://www.abukumansnet.org/>

